

自分の中心を物語れ！

永田円了

Your own Story

自分の中心を物語るとは、決して世間での、おのれのサクセスストーリーを声高に語ることではない。むしろ、外からは見えない、内面の成長を淡々と、そして生き生きと語ることである。

自分の中心を見つけるには

自分の中心を見つけるには、どうしたらいいのだろうか。未来画像鑑定の渡辺樹萌先生に見てもらえばいいのか、はたまた、アップルコンピュータのスティーブ・ジョブズ氏の哲学に頼ればいいのか。

英語で、*Life is best when it is authentic.*(真の自分が躍動したとき、その人の人生は最良のものとなる)と言う。自分の中心が活動したとき、人は何とも言えない幸福感に浸ることができる。そしてそのプラスの波動は、自分のみならず周りの人にも少なからず影響を与える。その時こそ、自分の中心の存在に気づくのであろう。



オバマ大統領の誕生は正しくこの事例である。オバマ氏の物語のエネルギーは、そのままアメリカ全土、いや世界の隅々までおよび、人々を勇気づけた。

物語の条件その

1)100人いれば、100通りの物語が存在できる 2)その物語の主人公は、どんなときも私自身である。私以外の人たちは、たとえその人がどんなセレブであろうとも、私の物語の中では脇役なのである。3)物語のシナリオライターも私自身である。この私が人生の筋書きを書かなければ、物語は一步も前進しないのである。

物語の条件その

物語には意外性がなければならない。「梅檀は双葉より芳し」式の天才伝説は物語にはならない。意外性とは、周りが見え！と驚くような行動、普通だったら絶対にしないことをする。普通だったら絶対に行かない所へ行ってみる。普通だったら絶対に許さない人を許す。普通だったら考えられないような逆境に、新しい可能性を見る。

物語の条件その

エゴが仕切る自分だけの夢を追う人の物語には、表面のきらびやかさは目立っても、心の深みから滲み出る喜びはない。自分の人生シナリオに、他者のシナリオが織り込まれたとき、真のダイナミックな物語が展開するのである。

意識のパラダイムシフト ~ 私は犠牲者ではなく、生存者だ ~

脳科学者ジル・テイラー博士、37歳のとき脳卒中になる。周りの人は気の毒に思った、でも、彼女はこれ以上なく幸せだった。競争社会を生き抜こうとあくせく働いていたテイラー博士の左脳が停止した。しかしそのお陰で、ゆったりとした今を提供する右脳が活動し始めたのである。彼女にとって脳卒中は、意識のパラダイムシフトを否認なしに成し遂げる原動力となったのである。(NHKハイビジョン特集「復活した脳の力」3/24/2009)



つまらない物語をつくるためには、

つまらない物語をつくらうと思えば簡単なことである。大多数の皆がするようにすればよい。自分の殻、肩書き、アイデンティティにしがみつけばよい。岐路に立ったとき、より安易なみちを選べばよい。人の目を気にして、だだのよい子で居続けければよい。意外性を受け入れず、物事をただ計画通りにすることに満足を感じていけばいいのである。



映画「おくりびと」が教えてくれる、ダイナミックな物語とは、

30年前に妻子を捨てて女と逃げた父親が死んだ。さああなたならどう行動する？絶対に許せないと思いつけていた父親、もうすでに籍も離れている人、なんでこの俺が会いに行かなければならないのか?!と考え、行動を起こさなければ、ここで物語は終わる。

しかし、本木雅弘演じる息子の覚悟は、苦悶の結果、父親の遺体を引き取り、納棺する。彼の横で優しい眼差しで見守る妻、彼女もまた許せなかった夫の納棺師の仕事を受け入れる。

「許し」が引き寄せるダイナミックな物語のエネルギーは、文化、国境、言語を越えて、人の感動を呼んだ。物語の力である。